

## 司会者による講師佐藤雅彦の紹介

### 佐藤雅彦 略歴

1954年、岐阜県海津市に6人兄弟の次男として生まれる。小学校時代は算数が得意で、作文が苦手な少年だった。

1977年、名城大学工学部数学科を卒業。その後、中学校の数学教師を経て、IT企業でシステムエンジニアとして勤務する。

39歳の時に川口福音自由教会で洗礼を受け、クリスチャンとなる。

2005年、51歳の時にアルツハイマー型認知症と診断される。診断後は苦しい生活を送るが、旧約聖書の「わたし(神)の目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」という言葉に励まされ、立ち直る。

その後、認知症の体験をもとに全国で講演を行い、講演回数は100回以上にのぼる。

- ・ **2011年 (57歳)** 臨床美術と出会い、絵画制作を始める。

- **2014年** 認知症の全国組織「日本認知症ワーキンググループ」を立ち上げ、共同代表に就任。同年、体験談を綴った著書『認知症の私が伝えたいこと』（大月書店）を出版。
- **2015年** この著書をもとにNHKで1時間のドラマが制作・放映される。
- **2016年** ピアノを始める。
- **2017年** 川口市で絵画と写真の個展「佐藤雅彦 希望の世界」を開催。
- **2019年** ピアノ発表会を開催。
- **2024年** 「佐藤雅彦 古希記念臨床美術作品集」を出版。

現在、一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループの理事として活動中。

## 【1 認知症当事者を苦しめる古い認知症観】

認知症そのものよりも、偏った認識や古い考え方が、認知症当事者の生活を制限し、苦しめています。古い認知症観は、当事者の自由や基本的人権を奪うだけでなく、社会の理解を妨げています。

## 古い認知症観とは？

現実では、認知症の症状の重い一部のケースがイメージとして先行し、以下のような誤解が広まっています。

**1. 何もできなくなる**

- 認知症になると全ての能力を失うという誤解。

**2. 何も考えられなくなる**

- 認知症になった人は思考力が完全に失われるという偏見。

**3. 何も理解できない人**

- 理解力が全くなく、話が通じないと決めつける考え方。

**4. ぼーっとしている人**

- 日常生活で常に無気力な状態にいるという誤解。

**5. 基本的人権がない人**

- 他人に迷惑をかける可能性を理由に、自由や権利を制限される。

**6. 徘徊や暴力をふるう人**

- 徘徊や暴言、暴力などの目立つ行動だけを認知症の全体像として捉える。

**7. 探し物や妄想ばかりの人**

- 物を紛失したり妄想を語るといった行動が認知症の全てだと考える。

**8. 記憶できない、物覚えが悪い人**

- 物忘れが顕著な人だけが認知症の典型とされる。

## 9. 判断力がない人

- 正しい判断や意思決定が全くできないとされる。

## 10. 学習能力がない人

- 新しいことを覚えたり挑戦する力が全くないという思い込み。

## 実際の認知症と偏見のギャップ

- 認知症の症状がすべて現れる人は少なく、徘徊や暴言といった行動が見られるのは当事者全体の**10分の1程度**です。
- 多くの当事者には**残された能力**や、適切な支援があれば活かせる可能性があります。

## 基本的人権を守るために

- 認知症の方も**美術館に行く権利、お酒を飲む権利、友人と交際する権利**を持っています。
- 「迷惑をかけるかもしれない」という理由で不必要な制限を設けるのは、基本的人権の侵害に繋がります。

## まとめ

古い認知症観による偏見をなくし、認知症の当事者を**一人の人格を持った人間**として尊重することが大切です。

偏ったイメージではなく、現実的で柔軟な理解が求められています。

## 問いかけ:

あなたの身近に認知症の方がいたら、どのように接しますか？

## 【2 新しい認知症観の提案とその重要性】

これまでの認知症観は、認知症を持つ人を「守るべき弱者」として扱いがちでした。しかし、この新しい視点は、認知症の人々を「可能性に満ちた存在」として捉えるものであり、非常に意義深い考え方です。以下にそのポイントを深掘りし、社会全体がどのようにこの認知症観を受け入れ、実践していけるかを考えてみます。

### 新しい認知症観の重要なポイント

1. 「守られる対象」から「可能性を持つ存在」へ
  - ・ **ポイント:** 認知症があっても、自分のことを自分で考えられる人として尊重する。
  - ・ **具体例:** 認知症の方が日常の意思決定に参加できる環境を作る。買い物や食事の選択、スケジュールの管理など、可能な限り自主性を尊重。
2. 残された能力と可能性を活かす
  - ・ **ポイント:** 失われた部分ではなく、残っている能力に目を向ける。

- **具体例:** 手先の器用さがある方には手芸や料理、創作活動を提供し、生きがいを感じられる場を作る。
3. **適切な援助で自立生活を支える**
- **ポイント:** 完全に依存するのではなく、必要な部分だけを援助する。
  - **具体例:** スマートフォンやデジタルツールを活用したリマインダー、近所の助け合いネットワークの整備。
4. **基本的人権を認める**
- **ポイント:** 認知症の人々にも人格と権利があることを再確認する。
  - **具体例:** 認知症患者の声を反映させるため、地域や施設で意見交換の場を設ける。
5. **「学ぶ力」と「役割を持つ喜び」を認識する**
- **ポイント:** 新しいことを学んだり、社会に役立つことをしたいという欲求を持つ。
  - **具体例:** 地域の活動や趣味サークルへの参加、簡単な仕事やボランティア活動の機会を提供。

## まとめと行動提案

新しい認知症観は、以下のような姿勢を社会に求めます：

- 認知症の人を「守られるだけの存在」と見なさず、彼らの自主性や可能性を信じる。

- どのような状態でも1人の人格を持つ人として接し、基本的人権を尊重する。
- 年齢や病気を理由に差別せず、誰もが堂々と支援を受けられる文化を築く。

### 具体的な行動例:

1. 認知症の方の意見を尊重するための対話の場を設ける。
2. 認知症に対する偏見をなくすための啓発活動を行う（学校や地域イベントでの講座など）。
3. 認知症の人が「活躍できる場所」を増やし、地域社会で役割を持てる仕組みを整える。

認知症は誰にでも訪れる可能性があり、避けられない老いの一部です。この新しい認知症観を社会全体で共有することで、認知症の方々が堂々と自分らしい人生を送れる環境を作り上げていきましょう。

質問 貴方の持っていた認知症観をおしえてください。新しい、認知症観を聞いて、あなたの認知症観は変わりましたか。 3人の人に、変化した認知症観を聞く。